

東京知道会

「大人の学苑祭@オンライン2021」 【芸術】

「木版画」

公募展出展作品

徳永庸夫 (S41年卒)



3/30

Aguirre - II

J. Tobin Egan



「Aging」 時を経て生じる変化の形 1995年

人間の時間スケールは100年。その次元を超える地球の時間スケールを描きたかった氷河の絵の説明。氷河の写真などを下地に自分で工夫した想像図。絵は具象画であるが、実物とは異なる。ダイナミックな感じを出すために自分が考える生きている氷の流れを表現。実際には存在しない氷河の絵。

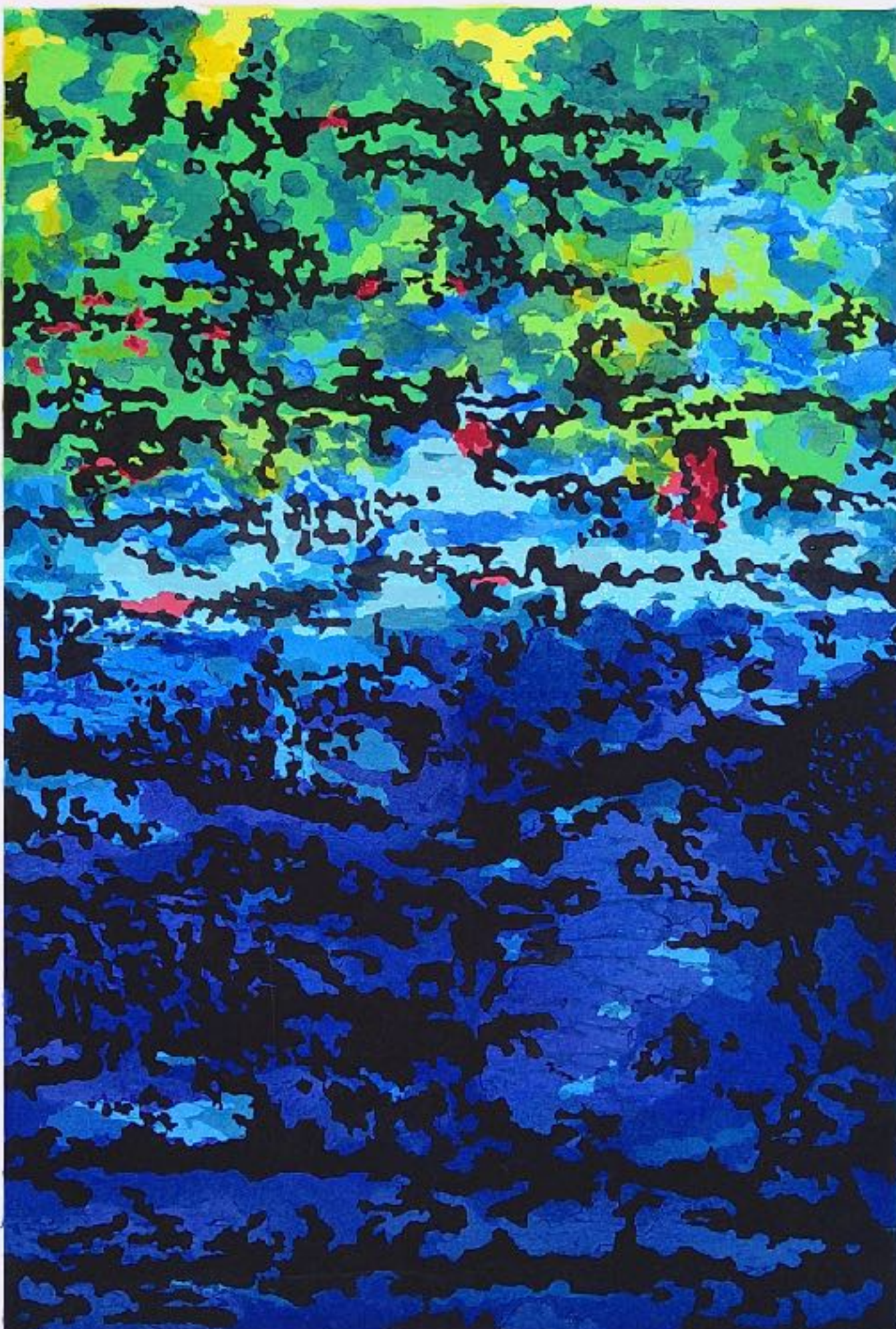
「Timescape時間の眺め」 1997年

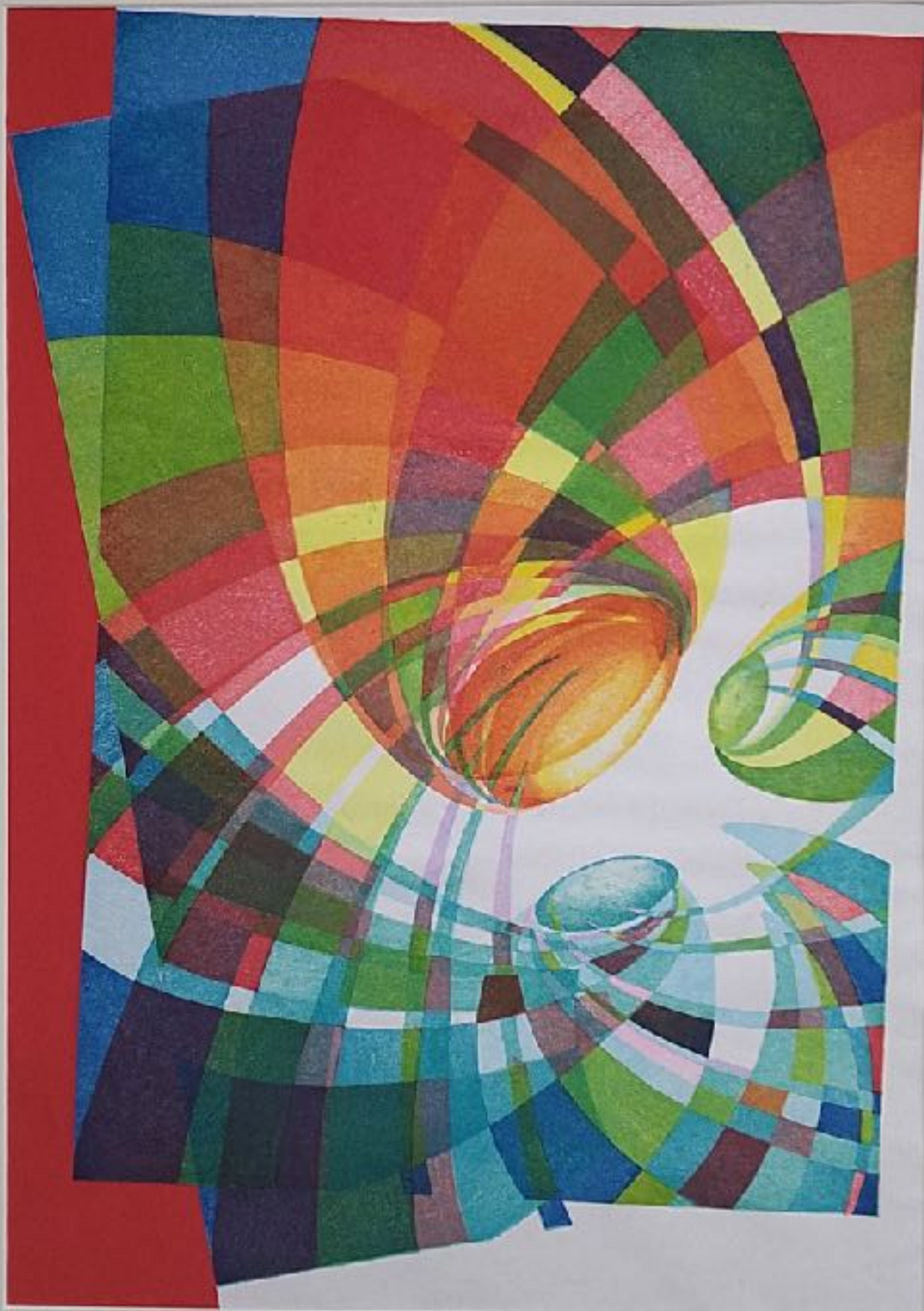
初めて抽象画に取り組んで作成した作品。やはり時間というものを意識した悠久の時間と空間を表す頭の中のイメージを板の上に彫刻刀で刻んで摺った。しかし、この絵のヒントは実は金属の組織の顕微鏡写真。様々な色が織りなす神秘の世界に見える。

数色の版の色を重ねて見えてくる色は思いもよらない美しい色が出てくる。版の色の配置を考えることは色の重なるの効果を頭の中で想像して設計する事である。それに必要なのは混色の知識であるがそれは各版画家個人の経験とノウハウ。実際に考えた通りの色になるか、思いもよらない素晴らしい色が出てくるか全然ダメな失敗になるかはやってみないとわからない。そこが木版画の醍醐味。しかし、経験を積めば失敗はなくなる。但し、天才は一発でいけるかもしれない。以上2作品は「日本製鉄たたら会」に掲載。

「日本製鉄OB会絵画同好会—たたら会」
のホームページ

<http://nsc-ob.sakura.ne.jp/kaiga000.htm>

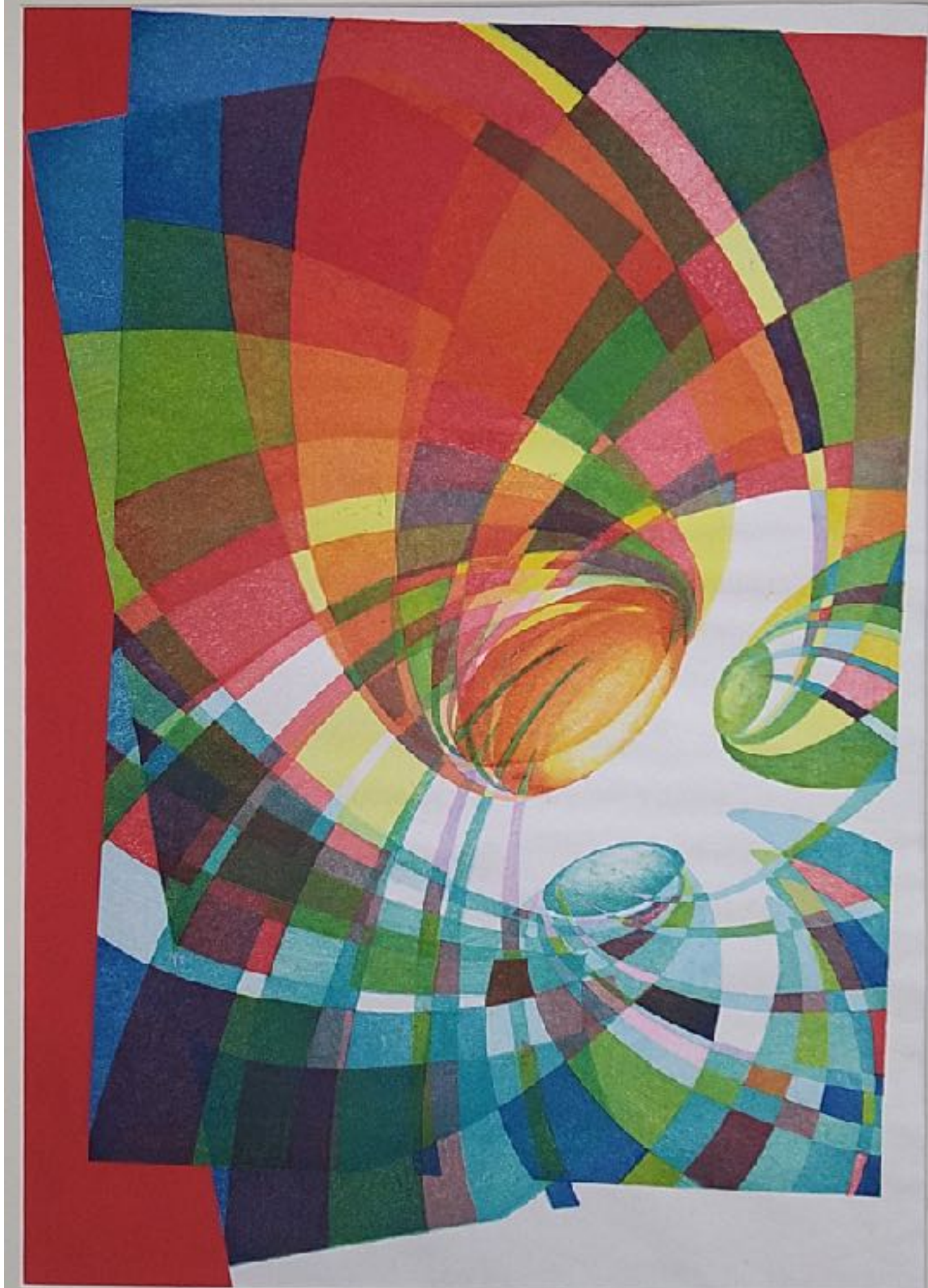




「Kaleidoscopic I、II」 2020年



春陽会展に出品したもの。タイトルの意味は「万華鏡のように」の意味から「変幻自在の」「常に移ろい変化する」という意味。こちらは11色の版画を摺りあわってから12°版木を回転させてわずかな時間の経緯で見えるものが変化する様子。といった感じでわずかな時間の経過を表現したかった。ここでも絵がずれて重なったことで全く予期しなかった偶然的な色の発現が面白い。このような絵を構成する色の配置を見るとききれいな色もあるし汚い色もある。汚い色の間に見えるきれいな色の輝きが楽しいイメージを作ってくれる。この絵の作り方からは、偶然にそれらの色の配置が作れて、そこから生まれるイメージは見る人の心の中に生まれる。「変幻自在」。それも一つの芸術になりうるかなという作品。これからしばらくは、このような絵の作り方でもう少し可能性を見極めたい。





以上